小説視写「夢十夜」

夏目　漱石

名前（　　）

▼こんな夢を見た。腕組みをして枕元に坐っていると、仰向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真っ白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然言った。自分も確かにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いてみた。死にますとも、と言いながら、女はぱっちりと眼を開けた。大きな潤いのある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真っ黒であった。▲

▼

▲

小説視写「風立ちぬ①」

堀　辰雄

名前（　　）

▼それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。そうして夕方になって、お前が仕事をすませて私のそばに来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合ったまま、遥か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊に覆われている地平線の方を眺めやっていたものだった。ようやく暮れようとしかけているその地平線から、反対に何物かが生れて来つつあるかのように……▲

小説視写「風立ちぬ②」

名前（　　）

堀　辰雄

▼そんな日の或る午後、（それはもう秋近い日だった）私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべって果物をかじっていた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処からともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間からちらっと覗いている藍色が伸びたり縮んだりした。それと殆ど同時に、草むらの中に何かがばったりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなしにしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上って行こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでいた。お前は私のするがままにさせていた。▲

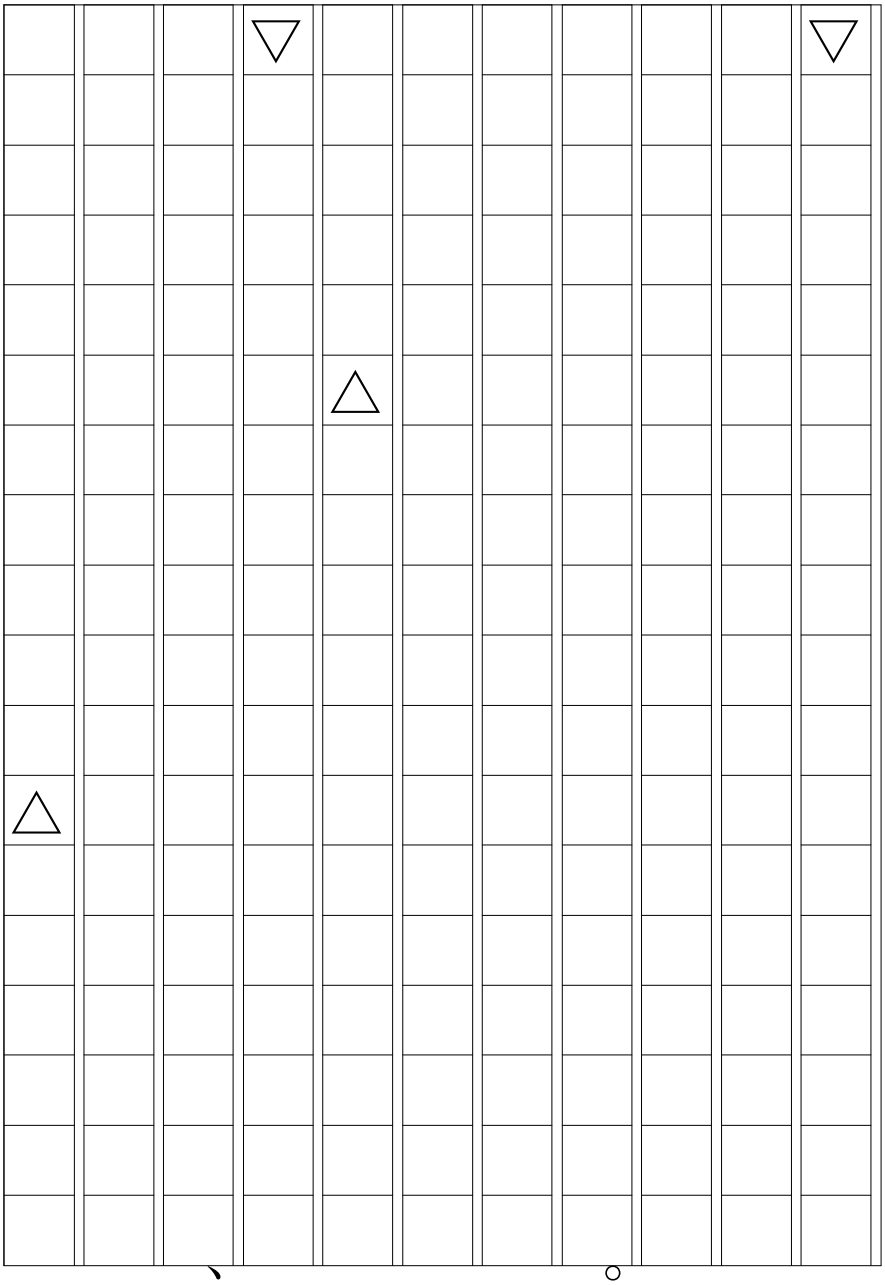
視写　「顔」

高村　光太郎

名前（　　）

▽顔は誰でもごまかせない。顔ほど正直な看板はない。顔をまる出しにして往来を歩いている事であるから、人は一切のごまかしを観念してしまうよりほかない。いくら化けたつもりでも化ければ化けるほど、うまく化けたという事が見えるだけである。△

▽顔ほど微妙にその人の内面を語るものはない。性情から、人格から、生活から、精神の高低から、英知の明暗から、何から何まで顔に書かれる。△



小説視写「蜜柑」

芥川龍之介

名前（　　）

▼ある曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいっている夕刊を出して見ようという元気さえ起らなかった。▲

▼

▲

名前【　　】

「曽根崎心中」

近松門左衛門

この世の名残、夜も名残
死に行く身をたとふれば
あだしが原の道の霜
一足づゝに消えて行く
夢の夢こそあはれなれ

あれ数ふれば暁の
七つの時が六つ鳴りて
残る一つが今生の
鐘の響きの聞き納め
寂滅為楽と響くなり
鐘ばかりかは草も木も
空も名残と見上ぐれば
雲心なき水の音
北斗は冴えて影映る
星の妹背の天の河
梅田の橋を鵲の
橋と契りていつまでも
我とそなたは女夫星
必ず添ふとすがり寄り
二人が中に降る涙
川の水嵩もまさるべし

			▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽		▽	▽	▽	▽	▽	▽
							△			△														
				△				△								△		△						
						△			△					△	△							△		
			△		△		△				△	△					△			△	△			
																							△	△

古文視写「あきあはせ」

樋口　一葉

名前（　　）

「雁がね」

▽朝月夜のかげ空に残りて、見し夢の名残もまだ現なきやうなるに、雨戸あけさして打ちながむれば、さと吹く風竹の葉の露を払ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落ちくるやうに雁がねの聞えたる、ひとつなるは猶さら、連ねし姿もあはれなり。△

「虫の声」

▽垣根の朝顔やうやう小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも、そのはじめの事おもはれて哀れなるに、松虫すゞ虫いつしか鳴き弱りて、朝日まちとりてこほろぎのはかなげに声する、小溝の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老いたる人、病める身などにて聞きたらば、さこそ比べられて物がなしからん。

「雁がね」

▽

△

「虫の声」

▽

「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」

李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し
煙花三月揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽き
惟だ見る長江の天際に流るるを

「春暁」

孟浩然

春眠暁を覚えず
処処啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知る多少

【黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る】

▼▼▼▼▲▲▲▲▲▲▲▲

【春暁】

▼▼▼▼▲▲▲▲